

『万葉集』から見る日本の古典

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

雄略天皇・その3

先回は雄略天皇と葛城一言神との邂逅について記し、「名告る」ということの持つ意味について言及した。今回は雄略天皇のエピソードとして『日本書紀』の説話を記す。

『日本書紀』は、葉師寺の僧景戒によって編まれた上、中、下三巻からなる仏教説話集である。延暦六年(七八七)に原型の本が成立し、以後、何度かの増補を経て弘仁十三年(八二二)に現在みられるような形態になったと推定されている。正式な名称は『日本国現報善惡靈異記』で、序文に唐の『冥報記』(唐臨の撰、唐代の仏教説話集)や『金剛般若經集驗記』(孟献忠が開元六年(七一八)に撰した『金剛般若經』の靈驗記

で、『今昔物語』などの説話文学に大きな影響を与えたことを意識して編纂されたことが記されている。書名に明らかかなように、「現報」(「三報」の一つで、身に善惡の業を成し、即ちその身に受けることをいう)と「靈異」を語る説話集である。仏法の基本理念である「因果応報」の理念がこの世に発現していることを説き、衆生の信心を深めようとする意図がうかがえる。その『靈異記』上巻の冒頭に雄略天皇所縁の説話「雷を捉る縁 第一」が載せられている。

小子部 栖軽は、泊瀬朝倉宮に二十三年天下治めたまひし雄略 天皇

「大治瀬推武天皇」

の隨身肺脯の侍者なり。天皇誓余宮に住みたまふ時に、天皇后と大安殿に寐て婚合ひたまふ時に、栖軽知ずして参入る。天皇恥ぢて頼みたまひぬ。時に当りて空に雷鳴る。すなはち天皇栖軽に勅して詔はく「汝、鳴る雷を請へ奉らむや」とのたまふ。答へて白さく「請へたまつらむ」とまうす。天皇詔言はく「爾らば汝請へ奉れ」とのたまふ。

小子部 栖軽は雄略天皇の「隨身肺脯の侍者」(「重要な侍者」の意)であった。天皇が警余の宮に住まわれていた頃のことであった。天皇と皇后が「大安殿」(内裏の正殿)で仲睦まじくしていた時、栖軽は気付かずその場に入ってしまった。あわてて取り繕う雄略天皇と皇后、引つ込みがつかない栖軽。気まずい雰囲気が出た。その時、空に雷が鳴った。天皇は栖軽に「雷を迎

えて来ることが出来るか」と尋ねる、対する栖軽は「お迎えしてまいりましょう」と答えたのである。時の勢いというのは恐ろしいものだ。原文の「奉請」は神仏を迎える意味をあらわす仏典用語による。

栖軽勅を奉り、宮より罷り出で、緋の

纓を領に著、赤き幡棒を擎げて、馬に乗りて、阿倍山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往き、輕諸越の衢に至り、叫喚び請へて言さく「天に鳴る雷神、天皇請へ呼び奉る」とまうす。然うして、此より馬を還して走り



小子部栖軽が雷神を捉えた伝説が残る雷丘(奈良県高市郡明日香村)

て言さく、「雷神なりといふとも何故か天皇の請を聞かざらむや」とまうす。走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴る雷落ちて在り。栖軽見てすなはち神司を呼び、攀籠に入れて持ちて大宮に向る。天皇に奏して言さく「雷神を請へ奉る」とまうす。時に雷光を放ち明り炫く。天皇見たまひて恐りて偉しく幣帛を進りたまひ、落ちたる処に返さしめたまふ。其の落ちたる処は、今に「雷岡」と呼ぶ。「古京の小治田宮の北に在り」。

さて、雷神を迎えるべくでかけた栖軽であるがその姿は、赤い鉢巻に、赤い幡棒(「幡」の意)を手にして馬に乗るといふものであった。しかも、山田寺と豊浦寺(どちらも雄略朝には建立されていない)の間を行き来して雷神の「奉請」を大声で願ったのである。すると、豊浦

寺と「飯岡」(所在未詳)との間に落雷があり、これを「神司」によって「籠」に載せて大宮に参内したのである。雷神は光を放つて輝いたので天皇をして恐れ、捧げものをし、落ちたところを放させた。話の落ちた「飯岡」の地名起源説であるのだが、この雷神が、『日本書紀』では「三諸岳の神」(大物主神とも、墨坂の神ともされる)であり、その姿は「大蛇」と記されている。『日本書紀』の成立は養老四年(七二〇)であり、『靈異記』とは百年の時差がある。その百年の内

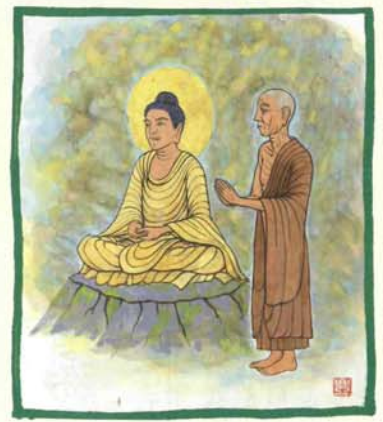
に、「大蛇」であった「三諸岳の神」は「雷神」として変容し、語られるのである。変化しないのは、「雄略天皇が命じ、小子部 栖軽が「神を捉え、雷岡」にその神を放つた」という骨子であり、なによりも、「雄略」が説話集の巻頭に据えられていることであろう。そもそもその成立理念が異なる『万葉集』と『靈異記』の「巻頭

の意義」が等しいとは言えないが、「雄略」という人物像に惹かれる古代の観念がここにもあったといえよう。

ところで、『靈異記』の話には後日譚がある。時は流れ、小子部 栖軽が亡くなった時、雄略天皇はその忠信を讃えて、その墓所に「雷を取りし栖軽の墓」と書かれた碑文を建てた。ところが、これを見た雷神は怒りに思つてここに落ち、散々に蹴散らしてやろうとした。ところが、裂けた碑文に挟まれてしまい、雷神は七日七夜慌れたという。天皇は建て替えた碑文に「生きても死にても雷を捕りし栖軽の墓」と記した。神たるものが怒みに思うのも大人げない気はするが、「生きても死にても」というモチーフは『靈異記』の中巻第一「緑の長屋王の説話や、下巻第一「緑の死したなお金剛般若經を誦誦した僧の説話へと続くモチーフともなっているのだ。

釋尊の弟子阿難陀

句・菅谷秀文 45



絵・橋本豊治

七 説法の釈尊徒弟阿難陀

阿難尊者はパーリ語でアーナンダ、「多聞第二」と呼ばれる。釈迦族の出身で釈尊の徒弟、仏典に出てくる回数は大弟子の中で阿難尊者が一番。二十五年間侍者を務められたのである。

釈尊が入滅された後、その師の教えをまとめて確定する為に、七葉窟の第一回の結集に参加し、二十五年間の侍者としての体験によって、結集を終わらせたという。